

『ニーチェのニヒリズム批判』

千葉 一弥

序

ニーチェの哲学は古代から十九世紀末に至るまでの西洋の精神史を或る一つの価値崩壊の過程であると捉え、その過程すなわち「ニヒリズム」に対して批判を加えた上で⁽¹⁾、それを克服するため新しい「価値転換」を行おうと試みた。ニーチェによれば「価値」とは我々の「生存条件」、すなわち我々の生存に対して或る意味や目標を付与するようなものゝ総体である。価値とは我々に生存の指針を与えるものであるゆえ、価値の問題は各人の人生観ひいては宗教観の問題とも密接に関係する。一般的にニーチェの哲学は「ニヒリズム」という語のもとに理解されているようであるが、ニーチェ哲学がすなわちニヒリズムそのものを意味すると思われるのは誤解であらう。ニーチェは西洋における従来の思惟全体を

ニヒリズムであるとして批判し、自己の哲学はニヒリズムを越え行くものと考えていた。

本論の目的は、ニヒリズムの概念を中心軸にとりつつニーチェの価値についての議論を概観することである。(なお本論は「ニヒリズム」についての概括的な考察を踏み台として、むしろ現代における「価値」および宗教の問題について論者自身の見解を導き出すことを目指す。ゆえに「ニヒリズム」についての哲学論文としては内容が粗略に過ぎ、通俗的であるという批判は免れ得ないであらう。)⁽²⁾「ニヒリズム」という語はニーチェ自身によっても様々な意味で用いられるが、本稿では、その意味内容を特に次の二つに限定して論じる⁽³⁾。(一)ニヒリズムとは、この世における生存の価値を「無」であるとして否定するような思想体系の謂である。ニヒリズム

的な思想体系は生存の彼岸に絶対的価値が存すると主張し、我々の生存は彼岸に至るための過渡的意義しか持たないと考える。(二)この語はニヒリズム的思想が結果として引き起こすような、価値崩壊という歴史的事象をも意味する。ニーチェによれば、キリスト教というニヒリズムの宗教を基礎におく西洋の価値体系は⁽³⁾、今やニヒリズムという事象に直面させられている。

一 神の死

ニーチェによれば西洋の価値体系がニヒリズム的状况に直面しつつある理由は、西洋の思想的基盤が主にキリスト教であったからである。従来キリスト教は以下のような存在根拠を有していた。(一)諸価値の根拠としてのキリスト教。キリスト教的な解釈によれば神は世界の創造主であり、真善美および聖といった価値の究極に位置する。神の意志が世界の運行をつかさどっており、世界の歴史は神の意志の成就へと向けて収斂して行く。かくなるキリスト教的世界観はプラトニズムと結合して、西洋独特の二世界説をつくり出した。すなわち世界は「真なる世界」(永遠なるイデアの世界、理念の世界、客観)と、

「仮象の世界」(生成消滅する現象界、感覚や肉体によって制約された世界、主観)とから成る。前者は価値をはかる際の絶対的基準であり、前者が光であるとすれば後者はその影のこときものにすぎない。だが中世ルネサンス以後科学的思考がますます一般に浸透するにつれ、一切の事象を神の善なる意志のもとに理解しようとするような傾向は徐々に退けられていった。科学的思考は洗練され、信仰における真理と矛盾をきたすようになった。この矛盾に直面した西洋の知的良心(「誠実さ」)は、従来のキリスト教的価値に対する深い懐疑を生み出し、この懐疑が伝統的価値の権威を崩壊させるに至る⁽⁴⁾。「キリスト教的誠実さは一つ一つと結論をひき出した後、己の最も強力な結論を、つまり己自身に反抗する結論を引き出す。」かくなるキリスト教道徳の自己崩壊は一つの壮大な「大芝居」であり、「最も恐るべき、最もいかがわしい、だがおそらくは同時にあらゆる芝居の中でも希望を最も多くはらんだ芝居」なのだと言われる(GM:VI,2/428-429)。既成の価値体系が崩壊するということは、多くの人々の目には恐るべき嘆かわしい出来事として映るのであり、そこでシヨーパーンハウアーの論に見られるような厭世観も

出て来る。しかるにニーチエの主張によれば、むしろ西洋の人間はこの出来事を積極的に新たな価値創造へと転じて行かなければならない。(二)道徳の根拠としてのキリスト教。キリスト教は西洋の人間にとって道徳的価値の基準でもあったが、その核心にあったのは「同情道徳」である⁶⁾。同情道徳は「弱さ」「罪深さ」といった概念によつて人間存在を基礎づけ、また人間どうしを結合しようとする道徳である。ニーチエによれば同情道徳の根源に存するのは弱者に対する憐憫の情であり⁶⁾、この道徳は弱者の生存を肯定し保存することを目標とする。なおここで一言しておくが、ニーチエの論におけるキリスト教の概念は内容上特殊な性格のものに限定されており、必ずしも今日で言うキリスト教一般の概念とは一致しない点もかなり多い。また彼の論は神学や教理としてのキリスト教を視野に置くものではなく、あくまでキリスト教という形で現れるような現象や、その宗教が個々人に及ぼす心理的、思想的影響を思惟の対象にする⁷⁾。

これまで西洋の人々を支えていた希望は、将来においてキリスト教的なるものが絶対的真理として顕現し、弱き人間たちの幸福を保証してくれるのである

うということであった。しかるに現実はそのようになっておらず、今や人々は、かつての自分たちの希望に対する疑問を抱き始める。もしかすると自分たちの期待は裏切られたのではないか、キリスト教的価値に奉仕してきた人々の膨大な量の努力は無駄だったのでないかという考えが頭をもたげる。これまでの一切は「徒勞であつた」という絶望の感情がニヒリズムの根本的な「パトス(情念)」である⁸⁾。もはや今では諸価値およびキリスト教道徳の根拠としての神は、絶対的權威としての力を喪失した。すなわち「神は死んだ」のであり⁸⁾、一切の根拠としての神という概念は「もはや余りにも極端な一つの仮説」となつてしまった(571:VIII, 1216)。西洋の人間は、かくなる事態に対して、いかなる態度をとるべきか。古い神に早く見切りを付けるべきであろうか、それとも古い神に対する信仰を保持して行くべきか。ニーチエは断固として前者を選択すべきだと主張する。(その点、トルストイまたはルナンなど他の同時代の思想家たちがあくまでキリスト教内部の自己変革を志向してイエス崇拜に傾き、決してキリスト教そのものの否定にまで至らなかつたのとは根本姿勢が大きく異なる。)これまで西洋の人間は一切の事柄

の原因を全て神へと還元し、神という目には見えな
い權威に一切を棚上げして来たのである。だがニー
チエによれば、これから人間は自分の足で大地に誇
らしく立つべきであり、かつての同情道徳を乗り越
え自己の存在をより強きものへと高めて行くよう
にすべきである。

二 生存に対する解釈

従来の哲学においてはキリスト教的な価値が唯一
絶対だとされ、他の価値体系は悪なるものとして非
難された。キリスト教の神、隣人愛を基礎とする道
徳は自明の「真理」であると見なされ、それらは一
切の感覚的で經驗的なるものを超越する普遍である
と規定されていた。西洋の価値体系が言わば閉塞状
況に陥ったのは、かような排他的な価値観が支配し
ていたからである。だがニーチエによれば、もとも
と世界には唯一絶対の解釈などは存在しない。世界
は諸々の解釈相互の闘争によつて成り立ち、解釈を
行う点（遠近法）は無数に存在する。ニーチエの見
解に従うなら我々の生は、複数の解釈が相互に闘争
し合うことにより強化され、高められる。もし或る
一つの解釈が唯一の真理として通用し、絶対的權威

となつて他の諸解釈を排斥するならば、生のダイナ
ミックな営みは阻害されてしまふであらう。それゆ
え、まずニーチエはキリスト教を単なる遠近法の中
の一つという位置へと後退させる⁽¹⁰⁾。ニーチエは従
来の価値一元論を解体し、相對主義的な価値多元論
を打ち立てる。だがニーチエ哲学の最終目的は、一
度解体された諸価値を更に新たな秩序へと再編する
ことであつた。彼の考える新たな価値秩序にとつて、
キリスト教は決して望ましい一つの価値であるとは
見なされない。ニーチエ哲学はキリスト教を排除し
ようとする方向へとむかう。それはなぜであらうか。
かつて西洋は或る歴史的必然からしてキリスト教
を選択し、この宗教は西洋の精神的支柱として役
立つて来たのである。そのことを敢えてニーチエは
否定しない。確かにキリスト教は西洋の歴史を救つ
たのであり、とりわけ、この宗教は我々の生存に対
して或る意味を付与することにより人間を絶望の危
機から救つた。ニーチエによれば、かつて人間の生
存にとつて恐怖の対象となつたものは苦痛そのもの
ではなく、「何のために苦痛を受けるのか」という問
いの叫びに対して答えの欠けていたことであつた
(GM: VIII, 2429)。絶対的權威としてのキリスト教

徳という一つの「仮説」は、「人間が人間として自身を軽蔑することを防ぎ」、「人間が認識に絶望することを防いだ」のであり、言わば「自己保存の手段」であつた(5[71], 1215)。ただしキリスト教が説いた生存の意味というのは極めて自己否定的なものであつたゆえに、かの宗教は一時的に人間を救はしたが、また反面、多くの人間の精神を傷つけ害したのである。キリスト教は人間の罪責意識に訴えかけ、人間の繊細な良心を傷つける宗教であり、この点ゆえにニーチェは徹底した反キリスト者の態度を取る⁽¹¹⁾。

キリスト教的価値は人間の生から本来の力強さを奪い人間の良心を傷つけるような宗教であるから、これに代わるような新たな価値が西洋において立てられるべきである。そこでニーチェは、生存に対する新たな解釈の一つとして「超人」の論を展開する。

三 超人

ニーチェは従来の神に代わる理想として、「超人」という新たな像を創造した。「超人(Ubermensch)」とは、不断に自らの日常的な生存を積極的に超克(überwinden)して行くという人間の本来的な在りか

たを理念化したものである。超人は彼岸に存在する絶対的権威ではなく、人間の自己目的である。従来の神は世界に超越した権威であつたが、超人は人間が人間自らのために指定した内在的な理想である。ニーチェにとつての超人とは、従来の同情道徳や非利己主義道徳を徹底的に克服した強者のイメージであつた。ただし超人というのは具体的に何を指示するのかという問題について明確に答えることは難しい。ニーチェ自身は、誰々が超人であるという表現を用いない。超人は或る「典型」であると言われる。超人とは、通常の社会的規範を乗り越えて世界のありかたを変革してしまうような天才的人間のことだといふ表現も可能であろう⁽¹²⁾。目下のキリスト教的価値においては、精神的または宗教的価値体系の頂点に置かれているのは、弱き人間と聖職者である。これに対してニーチェは、「強さ」「力」の概念を軸に未来の社会像を構築し直そうとする。ニーチェの描いた理想の将来像によれば、いつか将来、超人が到来して従来の価値体系を打ち碎き、強者の支配による貴族政治が行われるということになる⁽¹³⁾。西洋の歴史を最終的に「ニヒリズム」から救うのは超人なのである。ニーチェの哲学は、まず差し当たつて

従来の価値の中心を無数の点へと、つまり個人へと解体した。世界の本質はカオスの中における闘争である。だがニーチェが最終的に提示した未来の社会像は、主体的な個人相互の闘争に立脚するものではない。なぜなら実際のところ完全に主体的で自由な個人というのは稀な存在であるにすぎず、その他の多くの人間は、社会の権威に従う大衆として存在するからである。それゆえ主体的で自由なる人間が大衆を導いて行かねばならない。まずニーチェの哲学は、従来の価値のピラミッドを破壊する。その頂点には神、聖職者、弱き人間が置かれていた。次にニーチェは、主体的で自由な人間を頂点とする新しいピラミッドを構築する。その最高点に立つものとして彼は「超人」の像を創造したのである。

結論

では最後に、ニーチェの提示した価値観の展望は今日の我々にとつていかなる意味を持つか、という問題について検討したい。ニーチェがまず従来の神を頂点とした価値ピラミッドを解体し価値の中心点を人間へと移した上で、人間本来の強さを新たな価値の基準としたことは、今日の我々にとつても大

いに示唆的であろうと考えられる。ただし彼が新たに構想したピラミッドの像に関して言えば、多くの問題が残されており、批判的な見方も可能であろう。例えばニーチェが行った価値転換はピラミッド内部の構成を逆転させただけであって、ピラミッドという構造そのものを変えることはできなかったのではないかという批判も成り立つであろう。彼の言う新たな価値秩序の原理は、人間の「強さ」であった。ゆえに我々自身が自己を強く高めるといふ目的のためには、弱者を保護する必要は無いという結論が導かれる⁽¹⁴⁾。ニーチェの無神論が逢着する点は、完全な個人主義および反道徳主義である。仮に我々が彼の言う理想の社会像を思い描いてみるなら、それは殺伐とした光景を呈するだろう。かくなる社会において個人のありかたは常にエゴイスティックであり、自己が他者を生きた人格として愛するという関係は成立しない。ニーチェの哲学には他者論が欠落しており人間の孤独な面ばかりが強調されるというのは、しばしば指摘されるところでもある。ニーチェは常にギリシアおよびローマ的なものと、キリスト教的なるものとを截然と区別し⁽¹⁵⁾、前者への復帰を理想としており、いきおい彼の論調は復古的かつロマ

ンの的にならざるを得なかった。弱者を保存するような旧来の道徳を捨てて力強い古典的人間像へ帰れという彼の極端な論は、後にナチスのイデオロギーによって誤った仕方では解釈され悪用される宿命を担うことにもなった。したがってニーチェ哲学はもともとニヒリズムの超克を意図したのであるが、今日の我々の目からすると彼の哲学自体が極めてニヒリスティック（虚無主義的）な論のようにも見えてしまう。かくなる問題点を有したがゆえに、ニーチェの論は最終的にキリスト教を凌駕するほどの大きな意義を現実の歴史においては持つことができなかったのであると考えられる。

我々の生存に対して意義づけを与えてくれるものは、西洋においてはキリスト教という既成宗教であった。その既成宗教が絶対的価値としての權威を喪失し始めたとき、ニーチェはまず価値の中心を個々の人間へと解体し、カオス的価値観における相互闘争という多元的世界像を提示した。だがニーチェの目からすれば人間は常に既成の価値に従って自己の生存を秩序づけるものであるから、多くの諸価値が同時にならび立つような全く無秩序な価値の構造は、人間を不安な状態へ、場合によっては絶望

的狀況へと追い込むことになる。すべての価値が全く相対化された状態もまた、或る意味ではニヒリズムであるとも言えよう。そこでニーチェは人間的本来的な「強さ」「超人」といった概念でもって価値体系の再編を企てたが、彼の試みは結果として空想的な領域にとどまり、現実を大きく変える力を持たなかった。一切は神が創造したという従来の世界観を逆転させ、ニーチェは、一切は個々の存在者の解釈作用が創造するのだと言った。しかるに価値の重心を神から人間へと移し替えるだけでは、生存の中に価値あるものを求めようとする人間の強い欲求に應えることは不可能であろう。もし仮に今日の我々がカオス的な多元論を超えた新たな価値を創造し獲得しようとするならば、その価値のシステムは、ニーチェが主張したような論よりも、はるかに深みと現実味とを帯びたものでなければならぬはずである。またあるいはカオス的多元論の状態こそが望ましいと捉える立場も大いに可能であるかもしれない。だがその場合にも、無責任な相対主義は我々に希望的な示唆を与えてくれないであろう。我々は諸々の価値を相対化する立場と、或る程度まで絶対化する立場との間を彷徨しつつ、あるべき価値体系の可能性

を今後も模索せざるを得ないのではないかと考えられる⁽¹⁶⁾。

凡例

ニーチェからの引用は全て KGW (Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe, herausgegeben von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Walter de Gruyter, seit 1967) に依拠。著作の略号は以下の通り。

GM: Zur Genealogie der Moral (道徳の系譜)

ZA: Also sprach Zarathustra (ツァラトウストラはこう語った)

AC: Der Antichrist (反キリスト者)

EH: Ecce homo (この人を見よ)

なお略号の無いものは遺稿断片からの引用で、断片番号を付してある。

註

(1) ニーチェ哲学における「ニヒリズム」の問題を分析的に論じた文献の数は国の内外を通じて多くは無い。その中で比較的新しく、しかも最も信頼の置ける著作はクーンの論 (Elisabeth

Kuhn, Nietzsche's Philosophie des europäischen Nihilismus. Walter de Gruyter, 1992) である。

(2) かくなる二つの意味内容に限定した場合、ニヒリズムはあくまで克服されるべきものであり、消極的意味しか付与されていない。しかるにニーチェは更にニヒリズムの意味を掘り下げて考え、この語に積極的意義をも認めようとする。ニヒリズムという語は、人間の生存に「無」の意識が不断に立ち現れるという実存的な事態をも指している。人間が日常生活において無と向き合うという事態は避けられない。この無から目を逸らすことは生存の問題を根本的に解決することにはならない。それゆえ人間はむしろ無と徹底的に向かい合うことによって単に消極的なニヒリズムを超えるべきであり、そのことによって新しい地平に立つべきだとニーチェは考える。

(3) キリスト教は仏教と共に「ニヒリズム的宗教」に属するが、ただし原始仏教が主にインテリ階級を対象にしたのに比して、キリスト教は弱者や貧者の救済を目標としていたという相違点は

あるとニーチェは結論してゐる(AC:VI,3/184)。

- (4) 一八八七年の遺稿による(5[7]I:VIII,1/215-216)。なお「誠実さ」と訳出した語は *Wahrhaftigkeit* であるが、この語には「真理性」という意味合いも含まれている。キリスト教道徳の中の誠実さが自らに矛先を向けるに至り、やがて自己崩壊するという論に関しては、『よるこばしき知識』三五七節、および『道徳の系譜』第三論文の二七節を参照のこと。かくなく「誠実さ」をめぐる問題においてニーチェが大いに示唆を受けた思想家はパスカルである。パスカル哲学における科学的良心と信仰心との関係、「幾何学的精神」と「繊細な精神」との相克および葛藤という問題はニーチェによつてどのように受け止められたのか。ニーチェはパスカルの科学的思考や、『パンセ』の前半に見られるような心理的分析を高く評価し、他方、信仰の問題については否定的な評価を下している。パスカルが科学の問題を信仰の問題に従属させたという批判はニーチェのみならず近代思想一般に広く見られる。ただし今日の多くのパスカル研究者は、パスカルは決して科学を

- 否定したのではないという面を強調してパスカルを弁護する傾向にある。なおこの問題は山崎庸祐氏によつても指摘されている(『ニーチェ』講談社学術文庫、一九九六年、五九〜七〇頁)。
- (5) 同情道徳に対するニーチェの批判には、まず第一にシヨーベンハウアー、ヴァーグナー、キリスト教の道徳論に対する反駁という意味がある。第二に近代のロマン的な人間理解を批判し、あくまで古典古代の男性的な道徳観をニーチェが目指したということがある。第三に注意すべきことは、ニーチェは他人に対して憐憫の情をかけることを総じて否定したのではなく、人間どうしが自らの弱さを通じて結び付くというシステムの有害さを指摘し、従来の独善的な利他主義や博愛主義を批判したということである。

- (6) しばしばニーチェは人間の強さと弱さを対照的に論じるが、いかなる基準をもつて人間の強弱を決定するかという問題に対してニーチェ自身が明確な定義をしているわけではない。「強さ」が單純に肉体の頑強さを示すものではないということは言つてもよいであろう。ただしニ―

チエがキリスト教批判の中で「弱者」という場合、それは社会的階層において一般的に弱者と呼ばれるものを内容として含んでいることは否定出来ないと思われる。

(7)更に詳細にニーチェの論を辿って行くと、彼の批判の矛先は主にラディカルな終末論的色彩の濃いキリスト教へ、とりわけ予定説や奴隸意志論を説く一部の禁欲のプロテスタントへと向けられていると考えられる。中世の世俗化したカトリックに対してはニーチェは比較的好意的な態度を取り、ルターの宗教改革については批判的である。

(8)一八八七年の遺稿による(91601:VIII.2/30)。

(9)「神は死んだ」という言葉の意味は厳密に取れば、キリスト教道徳における唯一神の死を意味する。ニーチェは古代ギリシアにおけるディオニソス崇拜を積極的に肯定しており、多神教すなわち多元的宗教観に意義を認めている。ニーチェの思想は俗に言う意味での「無神論」として簡単に片付けられない面を持つ。

(10)ニーチェの「遠近法主義」は比較的良好に一般に知られているものである。一般的な理解におい

ては、それは唯一なる絶対を複数の相対へと解体することを目的とする一種の懐疑主義であると見なされているようである。確かに遠近法主義は、従来の真理の独断性を批判し破壊するための懐疑主義という側面を有している。けれどもニーチェは単に従来の真理を批判し破壊したのみにとどまらず、そこに新たな秩序を再建しようとした。その点は後期思想において顕著になる。また遠近法主義そのものが遠近法の一つにすぎないとすれば、我々がニーチェの主張を真面目に受け取る必要も無に帰するのではないかという問題がしばしば指摘される。この問題については研究者によって見解もまちまちである。だが一つ言えるのは、遠近法主義を否定する従来の観方と、自らが遠近法の一つであることを認識している観方との間には或る種の質的な差異が認められるということであろう。ニーチェは自分自身の主張の真理性を決して低くは見っておらず、ニーチェがピュロンのごとき徹底した懐疑主義者であるという論は成り立たないと考えられる。ニーチェの懐疑は「懐疑のため」の懐疑ではなく一種の「方法的懐疑」だとも

言える。

(11) ニーチェのキリスト教批判は論理的に考えるならば一貫性を欠いているようにも見える。一方においてニーチェはキリスト教の歴史的意義を肯定しており、またキリスト教の発端となったイエスの思想の一部に共感を示す。イエスが実践したような「生は今日なお可能であり、或る種の人々にとっては必然的なものですらある。真正にして根源的なキリスト教は、今後のいかなる時代においても可能となるだろう」とも述べられる(AC:VI.3/208)。また、一切の事物に対して否定的評価を加えず、あるがままに万物を愛するという彼の「運命愛」の主張からすれば、ニーチェがキリスト教を非難する理由は無いとも考えられる。だが他方、ニーチェは諸価値の新たな秩序を求め、弱者を保存するキリスト教に代わるべき価値体系を模索する。ニーチェが理想とする価値体系は、ギリシアおよびローマ文化、古代インドの『マヌ法典』に見られる厳格な身分制度、イスラム文化などに現れ、これらに比してキリスト教は拒絶されるべきものと見なされる。そして『アンチクリス

ト』の最終章では「私はキリスト教に対し有罪を宣告する」という結論が導かれる(AC:VI.3/250)。

(12) 「超人」という言葉を具体的な「天才」の名と置き換えてもよいかどうか、という問題に答えることは難しい。一方でニーチェは「未だなお超人は一人も存在したことが無い」と言う(ZA:VI,1115)。かくなる言い方からすると、超人を歴史上実在の英雄と同一視することは正当とは言えないであろう。だが他方、しばしばニーチェは超人をナポレオンやチュザール・ボルジアと結び付けて述べている。また著作『この人を見よ』の中でニーチェは、超人は単なる「天才崇拜」の産物では無いとも言っている(EH:VI.3/298)。なおニーチェの超人思想に酷似したものがドストエフスキイの『罪と罰』(第三編の五)に見られるが、ニーチェはこの作品から超人の発想を得たわけではない。確かにニーチェはドストエフスキイの一部の諸著作に目を通してはいるが、文献学的に見れば、それらから彼が思想的な面で大きな示唆を直接に受けたとは到底結論し難い。

(13) かくなるニーチエの政治思想の源泉となつたのは、主にプラトンとアリストテレスである。

(14) 「弱者達、出来損ない達は没落すべし、これがすなわち我々の人間愛の第一命題。今後も彼らの没落に手を貸してやるべきである。」一つの背徳行為よりも有害なものとは何か。あらゆる弱者達、出来損ない達に同情するという行為である。この行為すなわちキリスト教……」
(AC:VI,3/168)

(15) 厳密に考えるなら、ローマ的なるものとキリスト教なるものとを截然と区別することは妥当とは見なされないであろう。著作『アンチクリスト』においては中世ルネサンスの道徳とキリスト教道徳とが対比的に論ぜられ、前者は力強く男性的なもの、後者はロマン的な快樂主義の一種とされている。だがそもそもキリスト教無し
のルネサンス文化は考えられないであろう。ニーチエのルネサンス理解は近代的な観点および彼独自の見解によって制約されているものと考えられる。

(16) 論者は、より成熟した宗教は多元的または相対的視点を少なくともどこかに持たねばならない

と考えている。他の価値体系や宗教に対する寛容の態度無き宗教、一般的な法体系や自然科学を真つ向から躊躇することなく排斥するような宗教は、今日の文明社会においては決して望ましいものではないと思われる。宗教は一般的な法体系や自然科学を必ずしも普遍的真理として認める必要は無いが、だからと言って、それらを排斥し公共の福祉を害するような権利を決して持ち合わせてはいいないのである。宗教についての多元論あるいは相対論は単に傍観者的で無責任な批判ではなく、現実における宗教の内部においても或る程度の妥当性を持つものだと論者は考えたい。

(ちば かずや 早稲田大学)